【別紙様式1】
仁愛女子短期大学

私立大学研究ブランディング事業
2018年度の進捗状況

学校法人番号	181002	学校法人名	福井仁愛学園
大学名	仁愛女子短期大学		
事業名	保育者育成のためのキャリア・ルーブリックの開発 ～シームレスな高校・短大・保育現場の繋がりを目指して～		
申請タイプ	タイプA	支援期間	2018 年度～ 2020 年度
参画組織	幼児教育学科、生活科学学科、地域活動実践センター、点検評価推進室、研究活動委員会、CI委員会、学生部、事務局		
事業概要	本事業の目的は、「保育職を志す高校生」が「豊かな経験を有する保育者」へと成長していくため、向上させるべき資質能力の継続的発展を示す「キャリア・ルーブリック」の開発を行い、高校・短大(養成校)・保育現場が三者間で連携・協働してシームレスな保育者育成環境を構築することにより、「保育の学びがみえる仁短」というブランドイメージの確立を目指すことである。		
①事業目的	本学幼児教育学科では、これまで3ポリシー(AP・CP・DP)を設定し、適宜その見直しも行なってきた。しかし、見直しを重ねる中で、入口側であるAPと受験生が身につけている資質能力、出口側であるDPと保育現場が求めている資質能力との間には乖離（＝段差）があることが浮き彫りになってきた。 この課題を明確にするため、平成26年度から4年間にわたり、福井県全幼稚園、保育所、認定こども園(計337園)を対象としたアンケート調査を実施し（回収率86%)、その結果を『福井県内保育者対象アンケート調査研究報告書』（平成30年3月発行）としてまとめ、本学の保育者養成の特徴や課題の数値化及びその分析を行なった。 現在、本学が設定する3ポリシーは、あくまで短期大学の立場で、学生が入学時点で保有していて欲しい学習水準から、卒業時点での獲得すべき学習成果の目標、及びその達成のための教育課程編成等の基本的な方針を言語化したものである。しかし、学生本人の立場からすれば、保育職を志望する時点から保育者になった後の将来に亘ってまで、一筋のキャリアとしてストーリー化でき得るものとはなっていない。 そこで本学では、「保育職を志望する段階」から「管理職の保育者になる段階」までの間に求められる資質能力を、一貫して体系化していくためのものを「保育者育成のためのキャリア・ルーブリック」と名付け、開発を行なう。 キャリア・ルーブリックとは、本人が、高校、短大、保育現場の各段階で身につけるべき資質能力及びその段階的基準を共通化し、それを共有することにより「学びの可視化」を図るためのものである。この開発により、三者がキャリア・ルーブリックという一つのツールで繋がり、一体となって保育者を育成していこうとする育成環境、即ち、継ぎ目の無い「シームレスな高校、短大、保育現場の繋がり」が構築される。 短期大学は、入学してから2年間という短い期間で保育者を育成し、しかも専門職就職率が9割を超える状況で学生を保育現場へと送り出す。言い換えれば、高校・保育現場と連携して、一貫した保育者育成環境を構築するには、短大が最も適していると言える。このように、本研究は、本学が短大の強みを活かしたものであり、研究テーマを地域社会にアピールしていくことで「保育の学びがみえる仁短」というブランドイメージの確立を目指すものである。		
②2018年度の実施目標及び実施計画	■研究活動 ＜目標＞ ○「保育者育成のためのキャリア・ルーブリック」開発に向けた予備調査・研究に着手 ＜実施計画＞ ○各都道府県「教員育成指標」の調査研究 ○「高大接続改革」の下、「学びの連続性」を実現している高大接続事例の調査研究 ■ブランディング戦略 ＜目標＞ ○保育現場と高校のつながりを強化（高校生に、保育を志すきっかけを提供する） ○すすんだ保育研究を行っている短大としての認知度の向上（本事業の告知を行う） ＜実施計画＞ ○保育体験ツアーなど、高校生が「保育と出会うイベント」を開催（2021年度まで継続） ○本事業を紹介するWebサイトや印刷物の制作（2021年度まで継続）		

③2018年度の事業成果	■研究活動 ○本ブランディング事業全体の方向性（各都道府県「教員育成指標」の調査等含む）についてまとめた論稿を執筆した（増田翼「高校・養成校・保育現場をシームレスにつなぐ育成環境の構築に向けて～「教員育成指標」作成事例を手がかりに～」『仁愛女子短期大学研究紀要』第51号）。 ○「キャリア・ルーブリック」開発に向けて必要な研究内容を洗い出し、個々のテーマの仮題を決定した。 ■ブランディング戦略 ○広報活動としては、ホームページで事業採択の公表を行った。 ○2019年度からの事業推進に向け、ブランディング推進室を設置し、推進体制の強化を図った。
④2018年度の自己点検・評価及び外部評価の結果	（自己点検・評価） 今年度は、3部会（研究実施、ブランディング戦略、プロジェクト評価）の自己点検・評価活動は行わず、全体会（次の外部評価の項目参照）で総括を実施した。なお、助成期間が3年に短縮されたことに伴い、短期間で成果が上げられるよう、年次計画の変更（5年→4年）及び組織改編によるブランディング推進室の設置を決定し、取組体制の再整備を行った。本格的なブランディング戦略活動は2019年から取組んでいく。
	（外部評価） 平成31年3月28日(木)、外部評価員を招き2018年度研究ブランディング事業全体会を開催した。外部評価員に対し「申請事業」「年次計画の変更」「2019年度事業計画(案)」の説明を行い、次の意見を得た。 ○ルーブリックは、各段階で求められる「質」を4段階ほどで示すようにした方が、現場での研修や自己評価に使いやすくなると思う。 ○ルーブリックは、具体的に現場で実践されるパフォーマンスの状態を評価し、目に見える形にしていくことに意義があると考えるので、できるだけ「現場でどういった能力が必要か」を整理する必要がある。そのためにはアンカー（作品例）を作る必要がある。トップダウンで作成するよりも、各段階の保育者がお互いを評価し合い、その状態を表す言葉づくりをしていく方が良いと考える。それにより、学生や現場が見たときに分かりやすい表現になる。 ○ルーブリックは、一旦作って完成するものではなく、常にフィードバックを元に改訂していくという考え方で作り上げていく方が良いものになる。 ○映像教材の作成なども検討してはどうか。そうすれば、授業や現場でも使えるし、広報でも使えると思う。 ○現場としても、ルーブリックの作成を通じて、現場と養成校を繋げる良い機会だと思う。 ○保育者は、業務に追われがちで、自分にどういった能力が備わっているのか等、客観的に自分を見て、論理的に自分たちの仕事を位置づける機会が無いので、そういう機会にできると良い。 ○少子化で子どもが減っているものの、０～２歳の保育需要は増し、保育者不足となっている。行政と養成校が緊密に連携して取り組むことが大事である。 ○保育の仕事にどんな価値があり、どんな魅力があるのかを高校生のうちからしっかりと伝え、それを本人や周囲、現場が共有できるものにして欲しい。 ○養成校だけでなく、現場も動かないといけないと考えているので、この事業に協力したい。
⑤2018年度の補助金の使用状況	○資料複写代（国会図書館） ○研究ブランディング成果発表会参加 旅費（愛知文教女子短期大学主催） ○図書購入費（研究関連書籍） ○第６回仏教教育学研究会参加 旅費（建学の理念と大学教育） ○2018年度研究ブランディング事業全体会　開催関係経費